

研修テーマ 子育て

【担当者】

Aコース：木村 真喜子／荒井 紀子／鈴木 淳／中沢 愛子

Bコース：佐藤 幹宏／山本 和人／山田 朋和／中山 聡／石井 学

【視察先・視察日】

- 1 サウスバンクーバーネイバーフッドハウス (Aコース・6月18日)
- 2 ボーイズ&ガールズクラブ BC (Aコース・6月18日)
- 3 ウェストサイドファミリープレイス (Bコース・6月25日)
- 4 シュタイナートロントスクール (Bコース・6月29日)

1. 調査の目的

我が国では、少子化や核家族化、地域のつながりの希薄化の進行、共働き家庭の増加等を背景に、様々な課題が拡大、顕在化している。子どもが地域の中で人々に見守られながら遊ぶという自生的な育ちが困難となり、乳幼児と触れ合う経験が乏しいまま親になる人も増えてきている。一方で、身近な人々から子育てに対する協力や助言を得られにくい状況に置かれている家庭も多いことなどが指摘されている。保育の充実や地域における子育て支援の展開など保育関係者の努力によって改善されてきた面もあるものの、子育てに対する不安や負担感、孤立感を抱く人は依然として少なくない。こうした中、児童虐待の相談対応件数も増加しており、大きな社会問題となっている。また、平成30年4月から施行された保育所保育指針に「地域子育て支援」が明記され、子育て支援が一層求められている。

一方、カナダでは、必要とされている支援が提供され、母親が比較的不安を持たずに子育てができる国と言われている。また、保護者の養育力を高めることが大切であると考えられ、カナダ全土で普及している **Nobody's Perfect Program** (NP プログラム^{*}) をはじめ、各種ワークショップやプログラムが多数実施されている。

本調査は、カナダの子育て支援に関する施設を訪問し、その特徴や実践方法を調査、日本の制度との違いを研究することで、今後の子育て支援施策の参考にすることを目的とするものである。

^{*}NP プログラムとは

0歳から就学前の乳幼児を持つ経済的に恵まれない若い親たちが、自信を持って子育てができるように作られたものであり、1980年代にカナダ東海岸4州の保健機関が共同開発し、今日もカナダ全土で実施され、予防的効果をあげている。

2. 国・都市概要

(1) カナダ全般

カナダは連邦国家であり、10の州と3の準州で構成されている。面積は998.5万平方キロメートルで、ロシアに次いで広い。



人口は、約3,515万人（2016年国勢調査）であり、ヨーロッパ系白人が72.9%、黒人3.5%、先住民4.9%、中南米系やアジア系などを含むその他が19.3%となっている。2011年の国勢調査より5%増加しているが、これは国民の出生率が向上したためではなく、その多くは移民の流入であると言われている。また、2018年から2020年までに約100万人の移民の受け入れが計画されており、今後の人口増加についても、移民によるものが大多数を占めると予測されている。

このように、人口や労働力を移民に頼るカナダでは多民族が共存しているため、互いの相違を認め合う姿勢が強く、個人と人権を尊重する意識につながっている。

公用語は、英語とフランス語が1969年に制定された公用語法によって認められている。公用語法では、連邦政府における英語とフランス語が平等な地位にあることが定められ、ほとんどの商品や看板等に両言語の併記されている。

文化について、カナダはしばしば「進歩的、多様で、多文化主義的」とされる。先住民の文化から、移住してきたヨーロッパ系の文化、さらに近年の様々な国からの移民の持ち込む幅広いものが含まれ、混じり、重なり、形成されている。その中で政治的にも多文化主義が憲法で守られ、政策的にも推進されてきたカナダは、世界中からの移民が造り上げた多民族国家であり、多文化主義を国策に掲げて互いの違いを認め合う人権意識の高い国である。

(2) ブリティッシュ・コロンビア州

訪問先であるブリティッシュ・コロンビア州（以下、「BC州」と言う。）は、西は太平洋、東はロッキー山脈に囲まれた、カナダ西海岸に広がる州である。広さは日本の約2.5倍あり、樹齢数百年の樹木が茂る温帯雨林、砂漠地帯、山岳地帯等地理的にも多様である。

地方自治について、BC州には160の自治体があり、市町村等に分かれている。その役割は、地方道路の建設・維持の他、5,000人以上の住民がいる自治体については警察サービスの提供が義務付けられているが、残りのサービスは自治体が任意で供給している。また、カナダ憲法によれば、基本的に保健医療、公衆衛生、福祉等の事項は州政府の管轄と定められているが、教育については、特定目的地方政府であるディストリクトにおいて、教育委員会がその責任を担っている。

(3) オンタリオ州

オンタリオ州は、東はセント・ローレンス川、南側は五大湖、そしてアメリカ国境に接している。四季がはっきりしていて温暖だが、夏と冬の気温差が大きい。首都オタワとカナダ最大の都市で、今回の訪問先であるトロント市や観光地ナイアガラ・フォールズがあり、面積は日本の約3倍、人口は約1400万人とカナダ全体の約3割を抱え、同国の政治・経済の中心地である。

オンタリオ州では、1995年には約850あった地方自治体を州主導で再編し、現在は444まで減っている。地方自治体は、概ね自治体(municipality)と特定目的自治体(special purpose body)の大きく2つに分かれ、さらに二層自治体と単一層自治体に分かれるほか、各種の委員会が存在し機能を分担するなど、複雑な地方自治の形態をとっている。

【参考文献】

- ・2013年海外情勢報告 北米地域にみる厚生労働施策の概要と最近の動向 (カナダ) (厚生労働省ホームページ)
- ・カナダにおける国と地方の役割分担 (財務省ホームページ)

3. 調査概要

(1) サウスバンクーバーネイバーフッドハウス

担 当

鎌ヶ谷市	こども支援課	木 村 真喜子 (班長)
柏市	地域保健課	中 沢 愛 子 (写真責任者)
千葉市	男女共同参画課	荒 井 紀 子 (記録責任者)
君津市	子育て支援課	鈴 木 淳 (編集責任者)

訪問日

平成30年6月18日 (月)

訪問先

カナダ ブリティッシュコロンビア州 バンクーバー市
「サウスバンクーバーネイバーフッドハウス」

面会者

ザラ・エスメール 氏 (エグゼクティブディレクター)
ジャネット・ワング 氏 (チャイルドケアマネージャー)



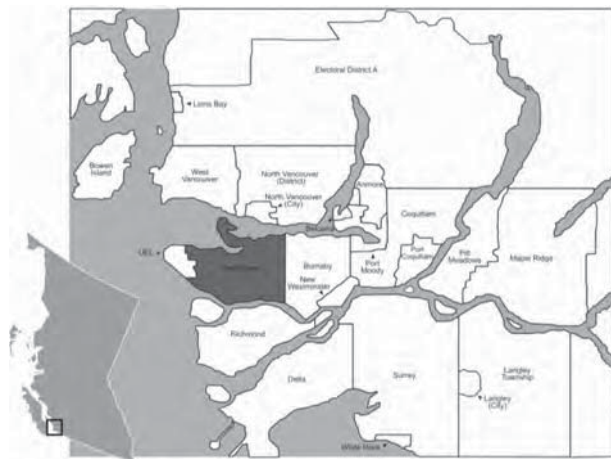
サウスバンクーバーネイバーフッドハウス施設内にて説明者のザラ・エスメールさんと

1. バンクーバー市概要

バンクーバー市は、面積は約113平方キロメートルの都市で、人口は約60万人であり、カナダで3番目に多い。カナダ西海岸ブリティッシュ・コロンビア州に位置し、太平洋に面し、海と山に囲まれている。気候は温暖であり、豊かな自然に恵まれ、原生林がそのまま残っているスタンレー・パーク（450ヘクタール）をはじめ、数々の庭園や公園がある。

2010年冬季オリンピック・パラリンピック競技大会が開催されたバンクーバーは、以前からバリアフリー化が進んでおり、1986年にバンクーバーで開催された交通万博のテーマ「Freedom to Move」に象徴されるように、障害を持った方が自由に移動できるまち造りがされている。さらに、バンクーバー国際空港は、障害者にも健常者にも使いやすいユニバーサル・エアポートとして国際的に高い評価を受けている。

また、様々な文化、言語を持つ人々が住むバンクーバーは、その多様性を活力と繁栄の源と考え、1996年からは、文化的な調和の促進に特筆な貢献をしている個人や団体に対し、文化調和賞（Cultural Harmony Awards）の授与を実施している。



2. 訪問先の概要

(1) ネイバーフッドハウスについて

カナダ BC 州のバンクーバー市には、2018年現在、13のネイバーフッドハウスがあり、地域住民のニーズを満たすための活動が実施されている。

今回訪問したサウスバンクーバーネイバーフッドハウスは、バンクーバー市の南東に位置し、1977年に BC 州ネイバーフッドハウス協会のメンバーとなり開設された。

ネイバーフッドハウスとは、イギリスのセトルメント運動を源流としセトルメントハウスやコミュニティとも呼ばれている地縁型コミュニティのことであり、移民支援組織としての歴史を持つ。ネイバーフッドハウスでは、地域の人の日常生活を包括的に支援するプログラムとサービスが展開されており、地元の大学生、高校生や地域住民などがボランティアスタッフとなって運営されている。

通常、ボランティア団体がサービスを提供する場合、テーマ設定をされている場合が多く、対象者は限定される。しかし、ネイバーフッドハウスでは、対

象者はその地域に住む全ての人々であり、多種多様なテーマ設定に基づいたサービスが存在する。また、地域の特性によりプログラムとサービスが異なる。

(2) コミュニティセンターとの比較

ネイバーフッドハウスと類似するものとして、コミュニティセンターがあるが、様々な異なる点がある。例えば、コミュニティセンターは、自治体からの補助金で成り立っているが、ネイバーフッドハウスでは、運営資金を個人、法人、政府などから集めたり、寄付にも頼ったりしている。コミュニティセンターのプログラムは、施設側が決めた内容となるが、ネイバーフッドハウスでは、市又は州の保健部門と連携した子育て支援、シニアに対する支援等、地域の要望に基づく内容である。また、使用される言語もコミュニティセンターでは、英語であるが、ネイバーフッドハウスでは、英語の他、中国語、パンジャブ語、韓国語等である。更に、ネイバーフッドハウスで提供されるプログラムは、無料又は低料金である。



施設入口



吹き抜けになっている室内中央フロア

(3) ミッションとダイバーシティ宣言

サウスバンクーバーネイバーフッドハウスでは、それぞれの文化における差異又は類似点を受け入れるという多文化主義的アプローチを実践し、人々が互いに尊重し合える関係を構築する目的から、次のようなミッションとダイバシティステートメント掲げられている。

なお、ダイバシティステートメントは、サウスバンクーバーネイバーフッドハウスに限ったものではなく、コミュニティセンターや他の非営利団体にも見られる。その内容は多文化主義の歴史や先住民への敬意として掲げられているが、サウスバンクーバーネイバーフッドハウスのように“ALL”という単語を何度も使用し、全ての人にわかりやすく親しみやすい言葉で表現している。この団体が第一目的としている「人々の交流の場の形成」を明確にする重要なキーワードであると言ってもよい。

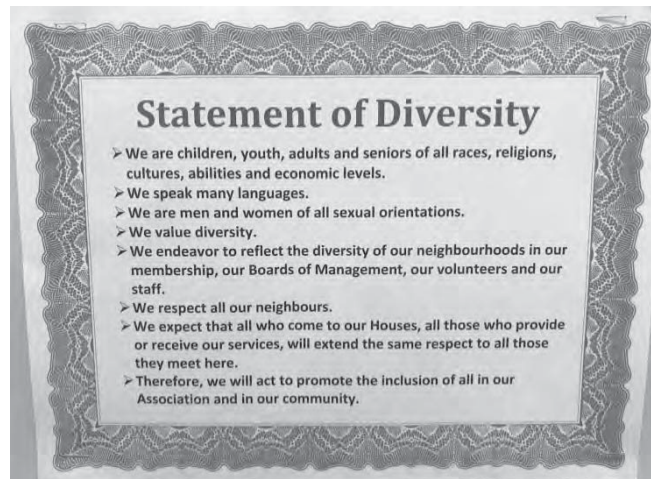
【ミッション】

- ▶ コミュニティーサービスの提供をボランティア主導で行う。
- ▶ 私たちの任務は、私たちの地域をより住みやすい場所にするることである。
- ▶ 私たちの目標は、人々が自分たちの生活を喜んで受け入れることを可能にし、そして自分たちの地域コミュニティを強化することである。
- ▶ 私たちの課題は、様々な人々の変化するニーズに合った新しいプログラムやサービスを開発し、多様なコミュニティと共に活動をすることである。



【ダイバシティステートメント】

- ▶ 私たちは、全ての人種や宗教、文化、能力、経済レベルにいる子どもや若者、大人、高齢者を受け入れる。
- ▶ 私たちは、多言語を話す。
- ▶ 私たちは、全ての性的志向の男性や女性を受け入れる。
- ▶ 私たちは、多様性を尊重する。
- ▶ 私たちは、私たちの会員や理事会、ボランティアスタッフにおいて地域に住む人々の多様性を反映するよう努力する。
- ▶ 私たちは、全ての隣人住民を尊重する。
- ▶ 私たちは、私たちの家に来る全ての人（サービスを与える又は受け取る全ての人）が、同じ敬意をここで出会う全ての人々に示すことに期待する。
- ▶ ゆえに、私たちは私たちの協会及びコミュニティにおける全ての包括的な取組を促進させ、活動し続ける。



3. 提供各種プログラム内容

前述したとおり、ネイバーフッドハウスでは、地域に根ざしたプログラムが無料又は低料金で提供されている。ここでは、ライフステージごとのプログラムを紹介する。

① ファミリー向けプログラム

子どもから10代前半までのプログラムを提供している。6歳以下の子どもに提供されるプログラムとして、子どもと親が自由に来て遊ぶことができるドロップインプログラム、プリスクール（保育園）、学童保育がある。また、思春期（9歳～12、3歳）の子と親との関係のプログラム、Twee n and Me 等がある。親がグループの中で互いの体験や不安を話しあうことによって、子育てのスキルを高め、自信を取り戻すNPプログラムも提供されている。



ファミリードロップインプログラムの看板



子どもの遊具が設置されている屋上



子ども達の作品が並べられている室内



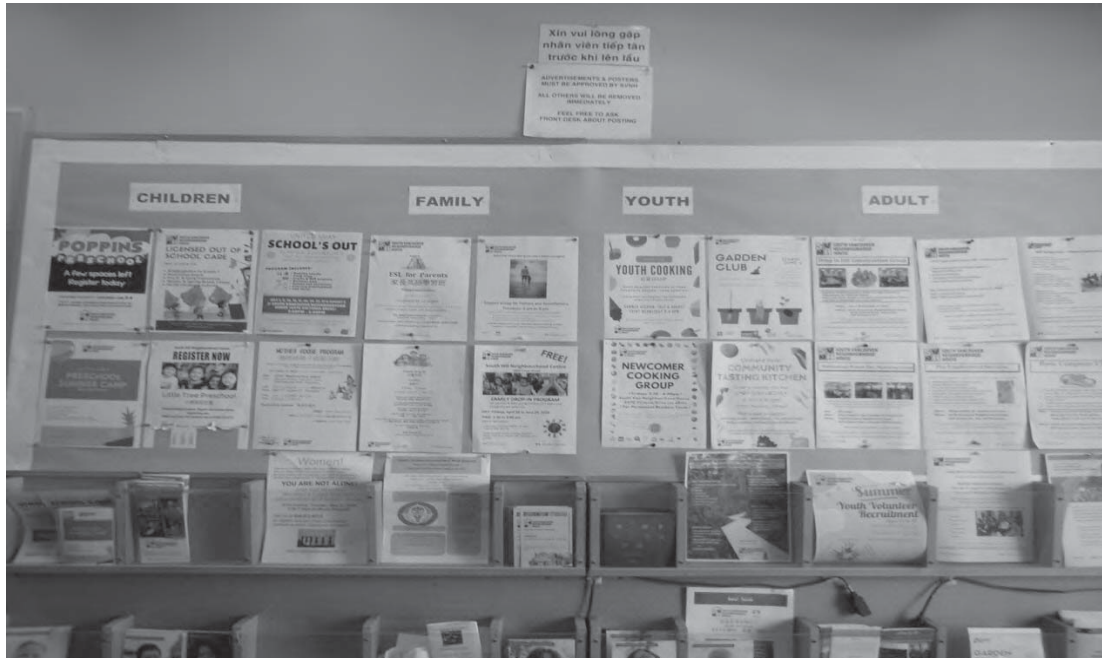
各種プログラムや利用者の誕生日の紹介

② ユース向けプログラム

英語の話せない新移民（13～16歳）に対するプログラムや英語が話せる在住及び新移民が行うユースアドバイザー制度（14～18歳）がある。ユースアドバイザー制度は、リーダーシップ力をつけることを目的とし、大人への教育としてバイオサイクルといった環境保全を主導したり、宿題の手伝いや小学校での家庭教師をおこなったりする。

③ アダルト向けプログラム

ユースと同様、移民向けプログラムとして、英語教育、コンピューター教室等があり、また就労支援もある。



入り口の脇には各プログラムの案内が掲示されている

4. 質疑応答

Q 利用者について

A 赤ちゃんから高齢者まで地域に住む全ての人々が対象者である。ただし、地域の特性により、提供サービスには差がある。高齢者向け体操や食事等の各種デイサービスもある。デイサービスは、バンクーバー沿岸保健局が担当し、局からの決定に従い、各種提供され、自立可能な（施設に入所するまではいかないレベルの）高齢者が利用する。

Q 自治体等との連携について

A デイサービスは保健局と連携している。州政府の省庁にある州民の住居を支援する部署とも連携している。また、コミュニティセンターとも連携し、例えば、センターで実施するプログラムに職員を派遣することもある。さらに、NPOとも連携している。

Q ボランティアの募集と登録制などの整備について

A 平成29年のボランティアは、689人である。内訳として約300人がユース、約200人はシニアで構成されている。ユースは学校の単位で必要なため、募集に困難は感じていない。メンバーになるには、まず1年に5回あるイベント（ビンゴ等各種）に参加してもらう。その後、ボランテ

ィア登録への申請を受けて、本登録という流れになる。登録に必要な資格について、まず、社会的弱者が安心してプログラムを受けられるよう犯罪歴がある人はなれない。無犯罪証明書とやる気があれば、登録できる。やりたいことによって部門に分かれ、オリエンテーションは部門ごととなる。

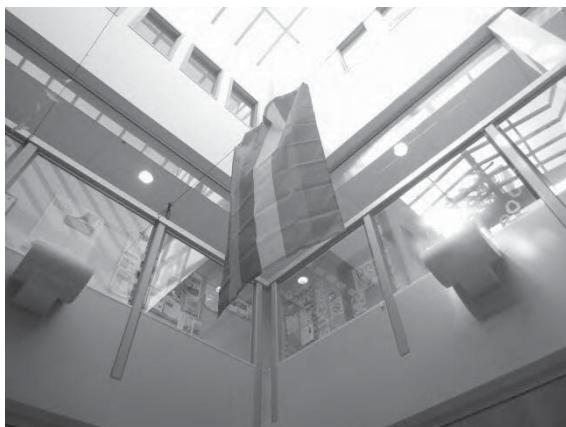
Q LGBT への配慮について

A もともとカナダが誰をも差別しない風土である。特別なプログラムはないが、レインボーフラッグ※を用意したり、GENDER NEUTRAL トイレ（誰でも使えるトイレ）を整備したり、フレンドリーなスペースを用意している。

※LGBT の尊厳と社会運動の象徴。性の多様性を尊重する姿勢を表現するシンボルとして「6色の虹」がよく用いられる。



GENDER NEUTRALトイレのマーク



吹き抜けフロアに飾られているレインボーフラッグ

高齢者には理解が難しい分野ととらえているが、対話が非常に重要と考えているため、コミュニティスペースに重きを置いている。また、LGBT の親のためのプログラムも作りたいと思っているが、ネイバーフッドハウスに来ることができない地域の人もあるため、まずはこちらから外にでて、需要をつかみ、数年後の目標としたい。

Q 自治体等との連携はほとんど保健局になるのか。

A ネイバーフッドハウスは非常に地域との関係が密接であるため、市の地域調査に協力している。また、地域の代表として市に意見を述べることもある。費用について、年間運営費用400万ドルのうち、バンクーバー市から年間11万ドルの補助を受けている。家庭とこども省(州政府)及び移民関係連邦政府とも密接な関係があり、スタッフの人件費を負担してもらっている。

Q DV の把握について

A DV ワーカーと地域を支援するファミリーサポートが協力して各家庭の状況を把握し、連携をしていくが、難しい面もある。また、DV のサインをど

こで見極めるのか、研修等もしている。しかし、より一層のサポートは必要であると感じている。

Q ネイバーフードハウス担当地区やサポート外の地域について

A ネイバーフードハウスは2018年現在13施設あるが、ハウスがない地区もある。また、一つ一つのエリアが非常に広く、例えば、本ハウスは9万1千人が担当エリアになるが、来ることが困難である利用者がいることも把握している。翌年の4月には新しいネイバー



フードハウスもオープンし、より多くの住民が利用できる環境を提供できるが、基本的に不足感は否めない。ネイバーフードはロンドンから始まり、オーストラリア、ドイツ、フィンランド等に広がり、今は世界的な会議なども開催されている。やはり全地域にあるわけではないが、存在する地域ではその重要性は伝わっていると思う。

5. まとめ

ネイバーフードハウスはセツルメント活動を源流に持ち、ヨーロッパやアメリカなど世界中に点在している団体である。各ネイバーフードハウスが行う事業は、地域のニーズに沿ったものであるため、地域により異なる。しかし、そこで行われるプログラムは、個人と個人を結びつける「ハブ」のような役割を担い、活動の目的は「人々の交流を育む場の形成」であると言える。

ネイバーフードハウスにおけるサービス及びプログラムは、全ての人々が利用できるように無料又は低料金である。ネイバーフードハウスにおける代表的なサービス及びプログラムは、職業訓練プログラム、働く親のための保育や親教育プログラム、高齢者のためのサービス、移民者の社会的孤立を防ぐプログラム、健康増進のためのリクリエーション活動などである。これらのサービス及びプログラムは、地域住民のニーズに基づく。サービス及びプログラムの提供方法の特徴は、利用者に対して行う専門的な援助ではなく、一人の人間としての非専門的なサポートである。ネイバーフードハウスは、例えるなら地域の全ての人々が訪れることのできる「自宅のリビング」のようなものである。その場所を通じて、個人・家族・地域を繋ぎ合わせて補完、補強する役割を担っている。

社会事業の専門分化が進むにつれ、需要と供給をスムーズに行うために分野ごとの支援体制が整えられてきた。すなわち、乳幼児は保育園又は幼稚園、就

労支援はハローワーク、介護はデイケアサービスといった具合である。そうした時代の流れにおいて、利用者を限定しないネイバーフッドハウスの活動は特殊であると言えよう。また、サービス及びプログラムをとおして、個々人のニーズを満たすだけでなく、利用者が「いつの間にか」参画者として活動に取り込まれることもある。例えば、ファミリードロップインプログラムを利用していた母親が、主催者として活動を行う場合もあるが、背景にはネイバーフッドハウスが、単に無料又は低料金で利用できるといった表面的なことではなく、相互扶助の思いが見られると同時にスタッフによる利用者の自発的行動を促す働きかけ及び支援がある。

さて、我が国の子育て支援に目を向けてみると、子ども・子育て支援新制度のもと、地域の多様な世代による子育て支援への参画が期待されている。しかし、それは、利用者はあくまでも利用者としてのニーズを満たし、ボランティアはボランティアとして活動に参画し、子育て支援員は子育て支援員としての専門性を生かした子育て環境の整備や支援をするといった役割の固定化がなされている。地域の多様な世代が子育て支援に参画することは重要である。つまり、今日の我が国に求められることは、従来型の専門化されたサービスという枠組みではなく、地域に住む人々を結びつける「交流の場」であり、そこから育まれる自然な相互扶助関係の新たな仕組みが必要である。

(参考文献)

- ・伊志嶺美津子(2009). 「カナダの子育てと子どもの最善の利益」 『こどもの文化』, 41, 68-73
- ・内閣府ホームページ
- ・外務省ホームページ
- ・岡野聡子(2017). 「カナダ・ネイバーフッドハウス研究Ⅰ」, 181-197
- ・岡野聡子(2015). 「多世代交流としての子育て支援に関する研究」, 1-65
- ・岡野聡子(2012). 「非営利団体における社会サービスの提供に関する一考察」 『環太平洋大学研究紀要』, 5, 31-39
- ・横浜市ホームページ

誰もが自分らしく生きることを認め合う社会へ～LGBT への配慮について～

カナダは、世界で初めて多文化主義を導入した国である。多文化主義とは、他者のオリジンを尊重し、共存していく考え方であり、カナダは、この考えに基づき、人種や民族等にかかわらず、個人の平等の権利を保障し尊重する社会が形成されている。多様性の受容は、人種や民族だけにとどまらず、年齢や性別、そして、性的指向及び性自認においても同様であり、例えば、法的にも、「同性結婚の認可」「同性コモンローパートナー（事実婚）の権利」が保障されている。

今回の視察においても、サウスバンクーバーネイバーフッドハウスでは、まず施設を入ったところにレインボーフラッグが掲げられ、LGBT フレンドリーが表明されていた。また、多目的トイレを整備するなどトランスジェンダーへの配慮等も実施されている。

また、トロントにおいては、レインボーパレードが近かったこともあり、街中にレインボーフラッグが掲げられ、街全体が LGBT をサポートする雰囲気となっていた。なお、パレードについて、2016年には、首相も参加しており、国を挙げて LGBT 支援をするという姿勢が示された。

一方、我が国は近年 LGBT を取り巻く環境は、大きく変化し、関心が高まりつつあるものの、理解が進んでいるとは言い難く、地方自治体においても対応を模索しているところである。

そのような中、国は「ニッポン一億総活躍プラン」等において、「性的指向、性自認に関する正しい理解を促進するとともに、社会全体が多様性を受け入れる環境づくりを進める。」と明記した。

さらに、オリンピック憲章に「性的指向による差別禁止」が加えられたことから、更なる LGBT への配慮意識の醸成が求められている。

LGBT への理解促進と支援にあたっては、例えば、同性パートナーシップ制度等のソフト面の整備や、トランスジェンダーの方が使いやすいトイレを設置する等のハード面の整備等、各種サポートが考えられる。しかし、制度を利用することは自分が当事者であるということを表明することとなり、アウトティングに繋がる恐れがある。やはり大切なのは、「カミングアウト」「アウトティング」という言葉が不必要になるぐらいの多様性の受容ではないだろうか。

今回の視察においては、カナダの「誰をもありのままに受け入れる」という風土を肌で感じることができた。このように多様性を受容する社会であるから、同性結婚などの制度も成立しているのであろう。

今後、日本に必要なのは、制度もさることながら、この風土の醸成である。そのためには、丁寧な周知啓発が必要だ。また、周知にあたっては、行政が LGBT を支援するという姿勢を明白に示すことが重要になると考える。違いを尊重す

る社会の実現は、LGBTのみならず、すべてのマイノリティの生きやすさにつながることを念頭におき、行政は各種施策を実施していかなくてはならない。

参考 トロントで見られたレインボーフラッグ等



街中にレインボーフラッグやレインボーカラーのオブジェが設置され、街全体がLGBTをサポートする雰囲気となっている。



トロント市庁舎にもレインボーフラッグが掲げられていた。

(2) ボーイズ&ガールズクラブ BC

担 当

鎌ヶ谷市	こども支援課	木 村 真喜子 (班長)
柏市	地域保健課	中 沢 愛 子 (写真責任者)
千葉市	男女共同参画課	荒 井 紀 子 (記録責任者)
君津市	子育て支援課	鈴 木 淳 (編集責任者)

訪問日

平成30年6月18日 (月)

訪問先

カナダ ブリティッシュコロンビア州 サレー市
「サレークラブ (ボーイズ&ガールズクラブ BC) 」

面会者

コリン・リンチ氏 (クラブコーディネーター)



「サレークラブ(ボーイズ&ガールズクラブ BC)」の入り口で説明者の方々と

1. 調査の目的

学童保育とは、共働き・母子・父子家庭の子ども達の放課後と春・夏・冬休みといった長期休業の生活を守り、それをとおして働く親の権利と家族の生活を守るものである。自治体により様々な名称があるが、いわゆる「放課後児童クラブ」である。

2014年6月、政府は、子どもが小学校に入学すると仕事と子育ての両立が困難になる「小1の壁」打破を掲げ、放課後児童クラブを2019年度末までに、約30万人分整備するという目標を掲げた。さらに、2014年4月にスタートした子ども・子育て支援新制度では、小学校4年生になると退所を求められる「小4の壁」解消の観点から、対象年齢を小学校6年生までに拡大したうえで、市町村に対し、ニーズの調査及び整備計画の策定を求めている。

我が国においては、女性の就労促進のために、放課後児童クラブの整備に力を入れている一方、放課後が子どもの成長に相応しい環境となっているのか、といった視点は希薄である。具体的に、虐待・ネグレクトからの保護、休息と余暇の権利、遊び・レクリエーション・文化・芸術への参加、自由な意見表明など、これらの権利が十分に確保しているとは言い難い。

諸外国では、国連の「子どもの権利条約」に照らし合わせ、女性の就労だけでなく、小学生の放課後のあり方が検討されている。こうした国々の共通の特徴として、親の就労の有無にかかわらず、全ての子どもの放課後の充実に向けた放課後児童クラブが整備されてきた。

以上を踏まえ、カナダにおける施設の特徴や実践方法について調査したものである。

2. サレー市概要

サレー市はBC州で2番目、カナダ全体では12番目に大きな都市で、人口は51万人を超えており、現在も増加を続けている。カナダで最も若い世代が多く、文化的に多様な都市の一つである。19歳未満の人口は、サレー市民の27%以上を占めており、市民の48%以上が家庭内では英語以外の言語を使用するなど、若さと多種多様な文化を併せ持つ。



3. 訪問先の概要

(1) 「ボーイズ&ガールズクラブ BC」の概要

ボーイズ&ガールズクラブは、1930年代からスタートし、80年以上にわたり放課後の子ども達に各種プログラムを提供している。子ども達に安全な居場所を提供すると同時に社会に出て行けるスキルを身につける施設であり、メトロバンクーバー内に12か所ある。今回訪問したサレークラブはサレー市の北西に位置している。

サレークラブでは、以下の4つのアウトカムを目指している。

- 1 仲間と仲良く
- 2 健全な生活を送る（そのため、他人に尊敬の念を持ちながら、健全な選択ができる環境を提供する）
- 3 リーダーシップ（コミュニティに貢献できるリーダーシップを目指す）
- 4 生涯教育（学校生活が終わっても様々なものに興味を持てるようにする）

これらのアウトカムを実現するために、ドロップインプログラムを提供しており、子ども達がそれぞれスケジュールに合わせて柔軟に参加できる仕組みを構築している。また、スタッフは、子どもと同様に保護者とも、コンタクトをとることを重要視している。

サレークラブでは、現在、460人メンバー登録があり、1日あたり110人の利用がある。利用者は30%移民、7%先住民であり、また、30%がシングルペアレンツである。

会費は、利用者の負担感が少なくなるようできるだけ低く設定し、基本年間200ドルとし、所得に応じて費用が決定する。30%の免除制度も整備し、それに伴い、対象者が分からなくする配慮も徹底している。

4. 視察内容

【運営体制等】

- ・寄付金を募集
- ・市の補助金あり
- ・サレークラブは比較的小さく、市の後援で作られてものは約8倍大きく、ティーンズ用ハウスもあり

【リスクマネジメント】

- ・全てのスタッフが応急処置可能
- ・報告体制も整備されており、事案が発生した際はすぐ本部に報告し、再発防止策をリーダーシップチームで検討

【1日の流れ】

- ・14:30から18:00まで
- ・登所時にサインイン、帰所時にサインアウト
- ・おやつからスタート（残す子もいるが、貧困層の主栄養となっている場合もあり、柔軟な対応が求められる）
- ・家族が迎えにくる場合もあるが、一人で帰るのも可能



施設外観

【プログラム等】

- ・飽きがこないよう多くの種類のプログラムを提供（体操、工作、ゲーム、料理、芸術など）
- ・アイスホッケーなどのスペシャルプログラムもあり、費用負担なしで受講可能（費用は400万ドル程度）
- ・プログラムは1つ45分で1日3つまで受講可能
- ・ホームワーククラブ、音楽クラブなどの12のクラブがあって、ボランティアにより運営



子ども達との交流「折り紙」

【学童保育の考え方】

- ・学童保育では、誰を対象にするかが重要と考えている。行く場所がない子どもに来てもらうことを目標に、以下の3点を重要視している。
 - （費用）補助金を整備
 - （内容）多様なプログラムを整備
 - （場所）学校の近くに設置
- ・チャイルドケアセンターとクラブの差は、前者は子どもの安全のための施設であり、後者は教育施設になる。日本の学童保育的な意味もあるが、クラブはそれに加え教育を考えている。
- ・北米に「子どもが全てにおいて成功的になるには、（次の）最低3人の大人が必要」という調査結果がある。

○ (親) 家族
○ (学校) 家の外の人
○ (地域) 家の外の人
もし、3人の大人がいない子どもがいれば、ボーイズ&ガールズクラブがそれになれるようにと考えている。他のクラブだが、奨学金の情報を子どもに提供するようなこともする。



クラブ BC が併設されている小学校前

5. 質疑応答

Q 面積あたりの定員について

A チャイルドケアセンターにはあるが、クラブにはない。需要に応えるため、クラブはチャイルドケアセンターにはしない。面積の要件を除けば、チャイルドケアセンターの要件を満たす高品質のサービスを提供している。

Q 薬物への関与とサポートについて

A アルコール及び薬物問題は減少している。しかし、数値的には減っているが、大量のアルコールを摂取する等深刻な案件が増えている。飲酒には、相当の理由があると考えている。したがって、飲酒をしないように言うのではなく、理解をさせることが重要であると考えている。薬物が合法化された後、どの程度子どもに影響があるかは分からないが、サポートは続けていく。他の施設には、専門知識スタッフがいる場合もあるが、当クラブでは、前述した3人の大人のうちの一人になり、サポートしていく。一つ一つの案件に対処するのではなく、全体として対応したいと考えている。

Q スタッフの確保について

A スタッフには、大学生もはいつて運営されている。クラブ卒業生が、ボランティアとして参加する場合もある。大学生の場合、授業スケジュールがあるため、調整が難しいことがあるが、BC州の失業率は低いため、人材確保が難しい状況になっている。

Q いじめ問題について

A いじめはある。発生した場合は、なぜいじめめるのか、どうやって相手を尊重するのか、スタッフと話し合う。また、プログラムを通じて、尊重し合うことを学ぶ。

6. まとめ

ボーイズ&ガールズクラブは、単に放課後を過ごすだけではなく、子どもの総合的な発達を促進することを目的としている。そのため、親の就労の有無に関わらず、全ての子どもにクラブの利用が保障されている。また、クラブにおける活動内容についても、子どもの権利の観点から、内容に子どもの意見を反映させ、子どもにとって楽しいこと、子どもの成長・発達に相応しい内容であることが大切であるとしている。スタッフの「子どもをサポートする3人の大人のうちの一人になる」という言葉から、子どもを第一に考える姿勢が見られた。また、サービスを安定して提供するため、寄付金募集やボランティアを確保するなど運営体制を整えていた。

このような状況と比較すると、我が国の放課後児童クラブの現状は、子ども達にとって相応しい場所とは必ずしも言えない。放課後児童クラブに関する議論が、女性の就労促進が重点に置かれており、利用者する子ども達にとってどうあるべきかといった検討が不十分である。放課後を子ども達の1日の時間軸として捉えられるべきであり、放課後児童クラブは子どもにとって「相応しい放課後の過ごし方」という大きな問題の一環として論じるべきであろう。

我が国の放課後学童保育は発展の過渡期にあり、制度としてはまだ成熟していない。しかし、需要は高まる一方であり、多方面から多くの期待や課題が寄せられている。今後の放課後児童クラブのあり方については、「子ども達にとって相応しい放課後の保障」を軸にし、さらなる見直しが必要であろう。これは、子どもの権利条約を批准した国として、当然取り組むべき課題であり、安心して子どもを産み、育てられる環境の整備や将来の人材育成の観点からも求められているのではなかろうか。

(参考文献)

- ・市町村海外派遣研修資料
- ・厚生労働省ホームページ
- ・日本ユニセフ協会ホームページ
- ・江東区ホームページ
- ・池本美香(2016).「放課後児童クラブの整備の在り方」『JRI レビュー』
Vol. 5, No. 35, 21-49

(3) ウェストサイドファミリープレイス

担 当

長柄町	企画財政課	佐藤 幹宏 (班 長)
長南町	議会事務局	山本 和人 (写真責任者)
鋸南町	保健福祉課	山田 朋和 (記録責任者)
酒々井町	生涯学習課	中山 聡 (編集責任者)
御宿町	総務課	石井 学 (編集責任者)

訪問日

平成30年6月25日 (月)

訪問先

カナダ バンクーバー市
「ウェストサイドファミリープレイス」

面会者

ハーディー氏



「ウェストサイドファミリープレイス」の入り口で説明者のハーディーさんと

1. 訪問先の概要

(1) 「ウエストサイドファミリープレイス」の概要

バンクーバー市にあるファミリーリソースセンターの一つで非営利慈善団体。ファミリーリソースセンターは、「家族に必要な人的・物的資源が全て揃っている場所」という意味に由来する、カナダで子育て支援の中心的役割を果たす特徴的な子育て家庭支援システムである。



「ウエストサイドファミリープレイス」のロゴ入り看板

1970年代初めに高校の元クラスメートの女性2人が同じような年齢の子どもを持ってから再会、幼児を持つ保護者が気軽に集まり、情報や経験を共有できる場所（ドロップイン）を提供することを目標に始めた団体。

1916年建築の古民家を1980年代に購入し、個人からの寄付により内部リフォームしながら運営している。このウエストサイドファミリープレイスがある地域は、バンクーバー市のなかでも富裕層が居住するエリアにあり、現在、中国の富裕層の増加等の要因でバンクーバー市は住宅価格が高騰しており、現在は3億円の価値がある建物を利用している。

2. 視察内容

① 設立の経緯

1970年代初めに高校の元クラスメートの女性2人が同じような年齢の子どもを持ってから再会、同じ年頃の子ども同士を遊ばせることができるとともに、同じ年頃の子を持つ親同士が堅苦しい雰囲気ではなく、気軽に立ち寄り、交流し、情報や経験を共有できる場所を提供することを目標に始めた。

② 理念

家族の関係（絆）を子どもの期間だけでなく将来にわたり長期的に強固にすることである。

また、学校生活が始まる前に、子どもたちの体の発育だけではなく心の準備を整えることも目的の一つである。

③特徴

子どもたちは遊びを通して多くのことを学ぶことから、子どもたちを自由に遊ばせることを重視している。

保育所やフリースクール等との相違点は、子どもだけ通うのではなく親も一緒に通う点にある。既成のプログラムではなく、利用者がやりたいことを助長する。

施設内は、さまざまな玩具や砂場遊びなどの道具が用意され、好きなものが使えるようになっている。

屋外には大きな砂場と滑り台、小屋などの遊具が充実している。室内は赤ちゃんが親とともに遊ぶためのカーペットエリアと、室内砂場や粘土等の感性を養うセンサーエリアに分かれている。



「ウエストサイドファミリープレイス」の施設の状況

④プログラム

・ドロップインプログラム

メインのプログラムである。9時30分～正午の間、好きな時に来て、好きな時に帰ることができる。ドロップインプログラムでは、健全な関係と子どもとのつながりは、遊びのやりとりを通じて達成されるという考えのもと、子連れのご家族に対し、新しい友人や、コミュニティー感覚を得る機会を提供している。また、1日の利用者は20～30人程度であり、プログラムに参加している間は携帯電話の使用は緊急時のみに限られる。

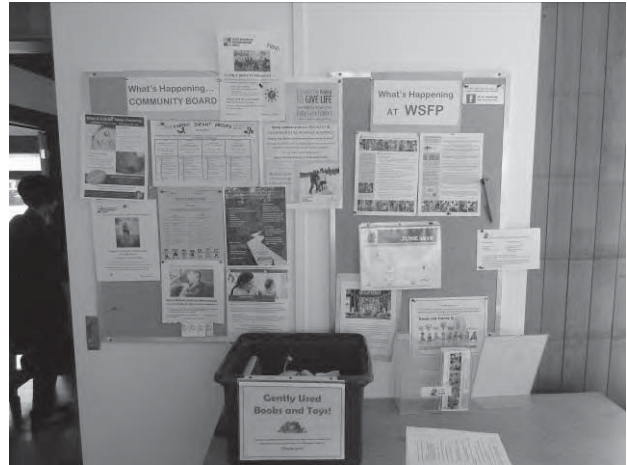
・NPプログラム (Nobody's Perfect Program)

このプログラムは親への教育プログラムである。0～5歳の子どもの親がグループの中で互いの体験や不安を話しあう機会を支援し、参加者の関心と懸念を共有する。スタッフが、一人ひとりの価値観を尊重しながらプログラムを進行し、両親は子育てのスキルを高め、自信を取り戻すことができる。また、講座終了後も参加者同士が子育て仲間としてつながっていくよう支援している。

この施設では、親が参加している間、子どものためのチャイルドミーティングとスナックが用意されている。

・マザーグースプログラム

赤ちゃんと両親のためのグループ体験プログラムである。言語感覚を身に着けることができる。英米を中心に親しまれている英語の伝承童謡の韻、歌、物語を使用し、ゆっくりとしたペースで実施している。



施設内での情報の共有と周知場所

[その他]

- ・サークルタイム（輪になって今日のお話）
- ・リトルシェフズ（食事づくりを通して、食の楽しみや栄養面の学習をおこなう）
- ・ポットラック（持ち寄りのパーティー）
- ・カウンセリング（いつでも話せる）
- ・服のリサイクル
- ・図書の出貸
- ・おもちゃの出貸

⑤スタッフ

スタッフは5人（幼児教育プログラム修了者、カウンセラー）と多数のボランティアで運営している。また、政府から夏の間学生を雇う資金を援助する制度を利用し、大学生を雇用している。その他、専門職（歯科医師・看護師・栄養士等）のボランティアもいる。長い歴史があることから、以前利用者だった人がボランティアとして事業に参加するケースもある。法人の理事はボランティアの最たるものとなっている。

⑥利用者

乳児～5歳児とその親が対象で、利用者は近隣の徒歩圏内の住民である。利用者の構成は2/3が親、1/3ベビーシッターとなっている。

利用料金は、会員制となっており、会費は年間40カナダドルとなっている。年会費のほかに、プログラムごとに利用料金がある。ドロップインプログラムでは1回2カナダドルの利用料金がかかる。週に20～30家族の利用がある。年間の延べ利用者は約17000人となっている。

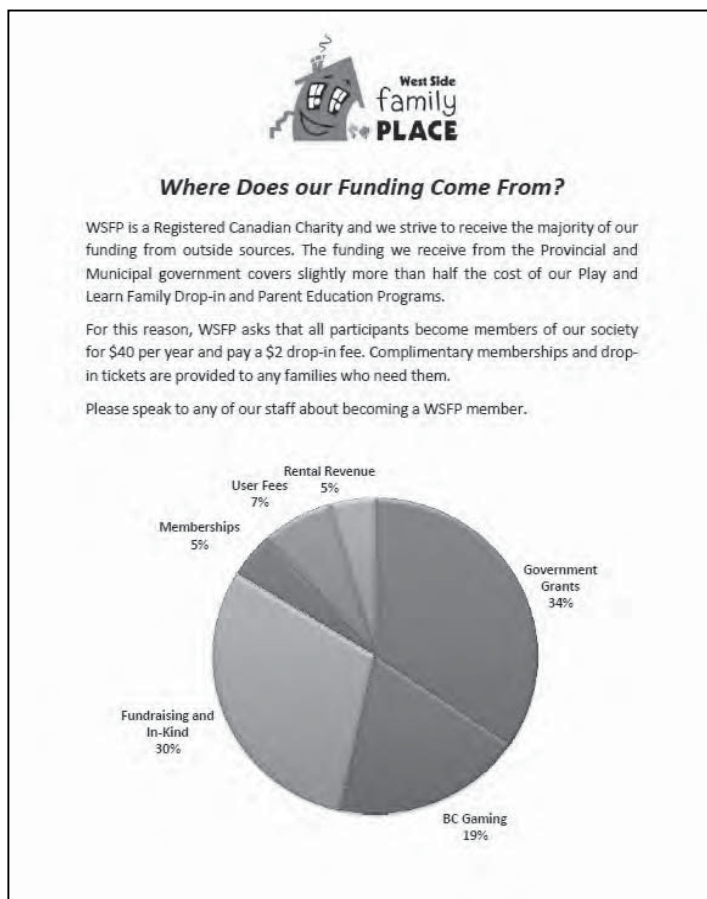
⑦その他

(行政との関係)

行政との関係は、資金面において連邦政府とブリティッシュコロンビア州政府、同州の宝くじ、カジノ等の収益基金プログラム（BC Gaming）のいわゆる公的資金で運営資金の54%を占めている。

虐待防止の観点で、子どもや家族の状況に異変を感じた場合には行政に連絡をしている。また、日頃の観察の中で、発達障害が疑われる子どもについても行政に連絡をしている。

親のメンタルヘルス等の対応できない場合は専門機関に繋いでいる。そのために、近隣のファミリーリソースセンターとの連携を図っている。



運営資金支援状況・内訳

(課題・今後の展望)

資金面で過半数の割合を占めている行政からの支援が減少傾向にある。そのため、寄付（ファンレイジング）に時間を多く費やす必要がある。また、築100年の建物を使用しているため、維持管理コストが増加している。銀行等と連携し長期的資産運用をしていく必要がある。また、建物についても将来的には新しい建物にし、拡張していきたいが、現在の建物に愛着を持っている利用者も多い。

ボランティアについては、高齢者のボランティアが不足している。カナダは広大なため、高齢者と触れ合うことができない家族も多いことから、高齢者ボランティアスタッフを募っていきたい要望があった。

時代とともに、親のニーズの変化にともないサービスを提供する必要があるほか、今後は、参加が少ない男親向けのプログラムを増やしていく予定である。



佐藤班長からハーディーさんへお礼

3. まとめ

国・地域が違っても、子どもを持つ親の問題は共通するものが多い。ウエストサイドファミリープレースを視察して、この施設が担う役割や実施している内容は、日本の「子育て支援センター」と大きな違いは感じられなかった。

日本の「子育て支援センター」は地域のつながりの希薄化、自分の生まれ育った地域以外での子育ての増加、児童数の減少等、子どもや子育てをめぐる環境が大きく変化する中で、家庭や地域における子育て機能の低下や、子育て中の親の孤独感や不安感の増大等に対応するため、地域において子育て親子の交流等を促進する子育て支援拠点として全国に約7000か所整備されている。

この7000か所の子育て支援施設とウエストサイドファミリープレースの違いは、行政主導による設置かどうかにある。

行政主導の設置のため、プログラムも社会問題化した子育て中の親の孤独感や不安感の解消が中心となり、親同士の交流がメインであって、プログラムが定型化しているという課題がある。

これに対し、ウエストサイドファミリープレースは、**Nobody's Perfect Program**をはじめとする、親が子どものかかわり方を学ぶプログラムを提供する意識が強く、自発的な活動であるので豊かで工夫された多彩なプログラムを提供できると感じた。

全国に7000か所に広がっている子育て支援の拠点がプログラムをドロップインだけで満足することなく、**Nobody's Perfect Program**の意識を強めていくことが、今後の子育て支援に必要と考える。

(参考文献)

- ・ウエストサイドファミリープレース視察時資料
- ・市町村職員海外派遣研修資料
- ・厚生労働省HP
- ・カナダにおける家族・子育て支援～ファミリーリソースセンターを視察して～(坂梨・水野・棒田・近藤・山本) 関東学院大学看護学部紀要 vol. 3 No. 1 (2016)
- ・岡野聡子(2017). 「カナダ・ネイバーフッドハウス研究Ⅰ」, 181-197
- ・カナダにおける社会福祉サービスの提供 (財団法人自治体国際化協会) 平成20年2月
- ・育児情報誌「miku」vol. 35 冬号(2014)株式会社絵本ナビ

(4) シュタイナートロントスクール

担 当

長 柄 町	企画財政課	佐藤 幹宏 (班 長)
長 南 町	議会事務局	山本 和人 (写真責任者)
鋸 南 町	保健福祉課	山田 朋和 (記録責任者)
酒々井町	生涯学習課	中山 聡 (編集責任者)
御 宿 町	総 務 課	石井 学 (編集責任者)

訪問日

平成30年6月29日 (金)

訪問先

カナダ トロント市
「シュタイナートロントスクール」

面会者

ケイティ氏、マエラ氏



子どもたちがのびのび過ごしている林の中で説明者のケイティさんマエラさんと

1. 訪問先の概要

(1) 「シュタイナートロントスクール」の概要

トロントのダウンタウンから公共交通機関で約1時間、オンタリオ州ソーニルの郊外にある私立の幼小中一貫校。キャンパスは、40エーカーを超える広大な敷地に、メインスクール、ウォルドルフ教員養成施設、退職者コミュニティ、や土曜日のオーガニックマーケット等の施設を備えている。



シュタイナートロントスクール

メインスクールの建物には、大きな教室、2つの体育館、音楽と練習室、芸術、木工と金属スタジオ、舞台、図書館、コンピューターラボ、キッチン、学生用の小さなカフェがあり、全校生徒は350名程の学校である。

0歳児の保育から高校卒業まで、創造的な考え方ができる人間に成長できるためのシュタイナー教育の理念に沿って教育カリキュラムを行う創立50周年の学校である。

ドイツで活躍した哲学者ウォルドルフ・シュタイナー（以下「シュタイナー」）が提唱したものであり、授業での芸術的体験を通じて意思、感情、思考を子どもに年齢に合わせて育む。9月から6月第2週までの期間に遊びと共に、信頼できる大人と参加することで子どもにとっても安心感が得られ、大人は同じ年頃の子どもの持つ者同士の意見交換ができる環境にある。

視察当日は、夏休み期間であったことから、生徒の人数も少なかったが、サマースクールでは普段通っていない子ども達の入力が可能であり、この日も陶芸教室や敷地内の林など屋外教室で学ぶ子どもで賑わっていた。

2. 視察内容

① 設立の経緯

シュタイナー・スクールは、オーストリアの煙草会社のオーナーであったモルトがドイツで活躍したシュタイナーの理念に共感して、1900年代に工場労働者の学びの場として設立したことが始まりである。現在カナダには8校、アメリカには230校ある。

②理念

シュタイナー教育の創始者である哲学者のシュタイナーは、自らは教育・建築・農業を学んだ。シュタイナーの教えは「人智学」に基づいている。0歳から21歳まで、神経科学の裏付けによる自我の7年周期に合わせて、創造的な考え方ができる人間になるよう教育をおこなう。

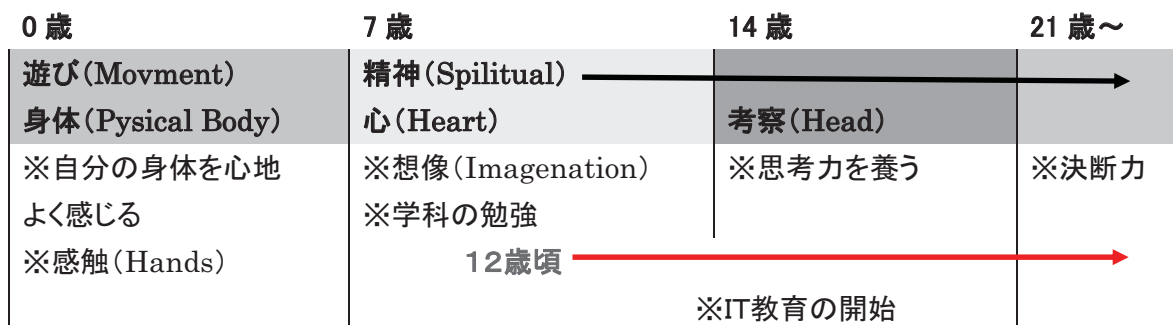
③特徴・プログラム

私立学校であるため、学校設備は整っており、芸術・感性を豊かにする目的で直角を避け、曲線を多用した施設になっている。私立学校は州の教育法に従う義務はないため、運営方針やカリキュラム、費用等は各学校によって大きく違う。シュタイナートロントスクールは学費が年間2万カナダドルとなっており、私立学校では中間ぐらいとなっている。

教育プログラムは、シュタイナーの7年周期の理論に基づいて、成長期に合わせ実施されており、1クラスは25人程度である。

人生を送るにあたって、何に興味があり、何に楽しめるかに気付かせる教育であり、成長・発達に合わせて、自分自身を感じ取るためのものとなっており、幼児教育だけでなく学校教育も行っている。

シュタイナー教育における「7年周期理論」イメージ



0～7歳：動き・体を作る時期 “hands”

遊びを通して運動神経やバランス感覚など体を発達させる時期であり、最初の7年が重要視されている。

このことから、幼少の頃はスクリーンに触れさせない考えがあり、テレビやタブレットなどは見させず、手や足をたくさん動かすこととしている。この時期は“No Media”としている。

7～14歳：心・感情を育てる時期 “heart”

教科として勉強を教えていくだけでなく、多くの話をして想像力や感受性を豊かにしていく。

14～21歳：知育を強調する時期 “head”

思春期を迎える時期であり、自我の裏付けなど、頭だけでなく心にも響くような教育を行っている。

“heart”の時期で教科の勉強を始めるが、この時期はイメージーションを働かせる時期のため、ゲームやお話しに例えながら教科の勉強を行っていく。このように、適切な時期に適切な教育をおこない、人生を送るにあたって「何に興味があり、何に楽しめるか」を気付かせることを主眼としている。

体だけでなく心や頭を育てる時期になると“**No Media**”から“**Know Media**”になり、テレビ、パソコン、タブレットを使っていくなど成長のステージに合わせて教育を提供している。

また、人の脳は28歳まで発達すると言われ21歳から28歳までの第4期もあり、そこでは決断力が養われるとされている。

6月第2週から8月末までは夏休みであり、サマーキャンプ（デイキャンプ）を実施している。普段通っていない外部の学校や外国から生徒も受け入れている。

[サマーキャンプでのプログラム]

・木工 ・陶芸 ・美術 ・ガーデニング

4歳から6歳は3クラスあり、1クラス最大12名。7・8歳のジュニアクラス、9歳から12歳のシニアクラスはそれぞれ15名の定員であり、半日と終日の選択性となっている。

サマースクールでは親の仕事の都合も考慮しながら送り迎えの時間を含めてケアをしている。



子どもたちが作った陶芸作品



幼児クラスが利用している部屋

④スタッフ

シュタイナースクールの教員の資格は国ごとに異なっているが、アメリカやイギリスには専門の養成課程があり、カナダにおいては同国の教員免許を取得している者もいる。

1年生から8年生まで同じ先生が受け持つことが安全であり、また理想であるが、人材確保の観点から難しい状況である。

⑤利用者

「子どもらしく育てたい」、「人間性を重視した教育を受けさせたい」、「勉強だけではなく他分野の才能を伸ばしたい」等の親の願い、また多様性が見過ごされがちな既存教育の代替としてシュタイナー教育が受け入れられている。

入学試験はなく、幼少期の入学は先着順となっている。高校生では社会的であって感情が表せること、学習ができれば、入学は可能であるが、単位取得の関係もあることから、他の高校からの編入は困難である。

学費については、州によって異なるが、市・州からの支援はない。一方でドイツでは政府からの支援もあり、学費は安くなっている。

3. まとめ

今回視察したシュタイナートロントスクールは私立の幼小中一貫校である。

カナダの教育制度は日本と大きく違い、カナダには、日本の文部科学省のような、国家レベルで教育を管理・運営する機関はありません。中央政府は指針を示す程度で、教育の管理・運営は完全な地方自治制。教育権は、各州の教育省がもっている。そのため、カナダの多文化的伝統の保障により異なった就学体系が存在する例もあり、例えばBコース「観光」分野で視察した、「セント・ジェイコブス」メノナイトのコミュニティーでは、義務教育を14歳で修了することが認められている。

カナダでは、学年（グレード＝Grade）は小、中、高校をグレード1～グレード12というように、一貫して数えます。区切りは州によって異なり、例えば、小・中・高でブリティッシュ・コロンビア（BC）州は7-5制、アルバータ州は6-3-3制、ケベック州は6-5制になっている。

<オンタリオ州の場合>

年齢	6歳	7歳	8歳	9歳	10歳	11歳	12歳	13歳	14歳	15歳	16歳	17歳
カナダの学年 (グレード)	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
教育システム	初等教育						中等教育			高等教育		
	エレメンタリー								セカンダリー			

義務教育は、州によって少し異なるが、6～7歳から16歳までとなっている。初等・中等教育の年数が違ったりするが、公立の場合、基本的には日本の小学校から大学までとほとんど変わらない。

義務教育期間の授業料は、政府が負担している。ただし、これは税金を支払っているカナダ国民が対象で、留学生は対象外となる。高校課程を修了するには、規定の単位を取得しなければならないが、これも州によって異なっている。

今回視察したシュタイナートロントスクールがあるオンタリオ州では、州の認可を得た私立学校であれば高校卒業資格を得る事ができ、シュタイナートロントスクールでは卒業すると高校過程の卒業資格を得ることができる。

視察の中で見る事ができた児童・生徒たちは、緑あふれる広大な敷地の中にある恵まれた施設の中で、少人数で、のびのびと課題に取り組んでいた。また、大きな木が生い茂る林の中で、全身を使い遊んでいた。私立の学校ということもあり、日本の公立学校と簡単に比較することはできない。

しかし、ゆとりある施設で、少人数に対し教育を実践している姿は、少子化が進む日本において、児童が減少し、空き教室が増加した日本の小学校の現状と重なる部分があると感じた。

少子化が加速していく中、郊外のゆとりある学校施設の統廃合は避けることはできないが、安易にコストや規模だけで進めるのではなく、「郊外のゆとりある施設」「少人数」を短所ではなく長所ととらえ、可能性を探ることも必要である。

(参考文献)

- ・市町村職員海外派遣研修資料
- ・在日カナダ大使館HP
- ・非営利団体カナダ教育連盟（CEA）HP
- ・日本シュタイナー学校協会HP
- ・The Plain and Simple Facts ～Inside the Old Order Mennonite Communities of the St. Jacobs Area～ メノナイトセンターパンフレット

4. 視察全体を通じて～結論に代えて～

子育てに正解はないと言われるが、自分の子育てが合っているのかどうかについて、多少なりとも親が不安になるのは日本もカナダも変わらないと感じている。社会情勢の変化等により子育てについて、身近で協力し合うことや、経験を共有しにくい面があるが、今回視察した「サウスバンクーバーネイバーフッドハウス」、「ウエストサイドファミリープレイス」では、文化、習慣に関わらず、誰でも分け隔てなく受け容れ、NPプログラムやドロップイン等のプログラムを通じて、悩みを共有し、子と親の交流を促進し孤立を防ぐための取り組みがなされている。

こうした背景として、カナダでは憲法（※1982年憲法第27条）で多文化的伝統を保障していることが挙げられる。「誰しも参加できる」、「誰しも認められる」、「誰しも構成員である」という「共存」、「包摂」をテーマとしており、それが民族や文化による違いへの最大限の尊重のほかにも子育て支援、LGBTへの配慮、障がい者等の社会参加という形で反映されている。

「移民国家」として、文化や習慣が違うあらゆる人々が、世界中から集うカナダが、平穏で共存して暮らすために辿り着いた結論だと感じている。

カナダと日本の子育て支援の違いとして、カナダは、子どもを中心に支援があるのに対して、日本は親が中心にあると感じている。その理由として、保育園や学童では、親の就労が基本であり、国を挙げて女性の社会進出を後押ししているからである。女性が社会進出し、その能力などを存分に発揮することは少子高齢化により、社会が縮小していきかねない日本が活力を維持しながら、平和で安心して生活していける社会を実現するための一つの「解」と思われる。

今回の視察で垣間見たカナダの現状と知見は、地域で働く私たちが、足腰の強い地域社会、地方自治のため大きな示唆となった。私たち海外派遣研修子育て担当メンバーは、この示唆を今後を活かし、より良い業務執行を行ってまいります。